

Ⅲ 和漢薬研究所関連セミナーおよびシンポジウム

1. 第18回和漢薬研究所特別セミナー

我が国では生薬の90%以上が、近隣諸国からの輸入に頼っている現状であるが、近年、これら国々が近代的産業政策を推進した結果、それらの国々の自然環境が破壊され、動植物資源の著しい減少、枯渇がクローズアップされてきている。このことは、とりもなおさず動植物を利用した伝統医療、プライマリーケアにも深刻な問題をあたえつつある。

そこで、今回、和漢薬研究所特別セミナーではこの和漢薬資源の現状を把握して、その対策として栽培化、代替品の開発、新しい学問分野の導入などを具体的に討論して、将来に貴重な和漢薬資源を伝えるために、我々は何を成すべきかを話し合いたいと思い特別セミナーを企画した。特に、セミナーの前半では和漢薬資源の現状をこの分野で最も造詣の深い研究者に報告してもらい、後半では和漢薬を遺伝子のレベルからとらえ、有用な遺伝子の開発、保存を中心に現在第一線で活躍している研究者に講演してもらった。参加者も非常に多く、質疑応答も活発であった。

大阪大学の米田助教授は和漢薬の品質の確保は品種の統一に繋がり、このことは反面、多様な資源を少数品種に限定するというジレンマを生むことを指摘した。また、北京医科大学薬学院の蔡少青教授は中国の生薬事情を紹介し、資源確保のための幾つかの提案を行った。農林水産ゾーンバンクの国廣泰史氏は農林水産省の種子保存に関する取り組みと現状、将来をわかりやすく説明し、薬用植物の種子保存に関する方向性を示した。奈良先端科学技術大学院の橋本隆助教授、東京大学大学院の海老塚豊教授は植物遺伝子の発現と調節、代謝工学に関する先端研究を紹介した。また、日本女子大の駒嶺穆教授は植物に形質導入する場合に大変有用な新しいベクターを紹介した。その他、薬用植物の育種（正山征洋教授）、生薬生産面からの提言（山岸喬教授）、遺伝子による植物分類と生薬学への応用（小松かつ子助教授、神田博史助教授）などが報告された。

本セミナーでは、高齢化社会に向かう我が国民が、健康維持のため安心して常用できる天然薬物が将来にわたっても確保される為の幾つかの方策が活発に議論された。これを契機に、和漢薬の資源を「遺伝子資源の確保」というまさに学問の最前線から見直す契機となり、多くの参加者の研究意欲を刺激し、さらに研究の進展に寄与できたのではないかと考えている。

演題プログラム

平成10年3月5日（木）13:30～17:30

1. 和漢薬の品種と品質確保への過去、現在、未来
米田該典（大阪大学薬学部）
2. わが国における生薬生産の変遷－生薬資源確保の展望－
山岸 喬（北見工業大学）
3. 漢薬の基源から見た品質の多様性
小松かつ子（富山医科薬科大学和漢薬研究所）

4. 生合成酵素遺伝子と医薬品開発

海老塚 豊 (東京大学大学院薬学研究科)

平成10年3月6日(金) 9:30~16:40

5. 中草薬資源の実情とその資源確保

蔡 少青 (北京医科大学薬学院)

6. 漢薬の基源植物についてフィールドワークからの考察

神田博史 (広島大学医学部)

7. 細胞・組織培養を応用した薬用植物の育種研究

正山征洋 (九州大学薬学部)

8. 農林水産ゾーンバンクにおける植物遺伝資源の保存・管理

国廣泰史 (農林省農業生物資源研究所)

9. 遺伝子工学を用いた薬用植物の改変

橋本 隆 (奈良先端科学技術大学院バイオサイエンス研究科)

10. 新しい Vector, MAT (Multi-Auto-Transformation) Vector

駒嶺 穆 (日本女子大学理学部)

第18回和漢薬研究所特別セミナー世話人

細胞資源工学部門 服部征雄